

第3章 研究の成果と今後の課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00068493

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



第3章 研究の結果と今後の課題

1. 研究の結果

(1) 令和3年度の間まとめと令和4年度の実践に向けての課題

令和3年度末に、各学年の間まとめ (p. 9, p. 22, p. 40) について協議を行った。

環境の構成については「魅力」「安心」「不満足さ」が「探究心」を育むのではないかという考えに至った。しかし、何が魅力的なのかという「魅力」に対しての分析や、何故「不満足さ」に意味があるのかを考えることが必要であるという課題が見えてきた。また、当たり前のこととして環境の構成に挙げられていなかった「時間・空間の保障」についても、その価値をしっかりと認識することが必要ではないかという課題も挙げられた。

教師の援助については「共感する」「思いに寄り添う」「モデルを示す」「試行錯誤を支える」援助が「探究心」を育むのではないか、ということが見えてきた。しかし、「試行錯誤を支える」という言葉では抽象的過ぎるため、幼児のどのような姿に対して、何故その援助が必要であるのかについて、詳細に分析していくことが課題として挙げられた。

令和4年度の実践に向けて、上記の課題を解決するために、幼児が何を楽しんでいるのか、今何をしようとしているかなど、幼児の言葉だけに捕らわれずにその目線や行動から読み取っていくことを職員全員で共通理解した。

(2) 事例の分析結果

事例で挙げられた環境の構成と教師の援助について協議し、キーワード化した。そのキーワードを、KJ法を参考に整理・分析し、要素を抽出した。

(i) 「探究心」を育む環境の構成

幼児の興味に沿ったものを環境構成することを前提として、キーワードとしては「十分な時間・空間」「魅力的な素材」「不満足さを感じるもの・こと」が挙げられた。しかし、中間まとめにおいて課題として挙げたように、「魅力的な素材」「不満足さを感じるもの・こと」について、何が魅力的なのか、何故不満足さが大切なのかについて曖昧が見られたため、さらに掘り下げることとした。

各事例における素材(砂、ロープ、雪、マツボックリ、水、色水、石鹼、ビニール)について、何が魅力なのか協議した。その結果、【繰り返し試すことができること】【思い通りになること】【思い通りにならないこと】【自由につくり変えることができること】【変化すること(一瞬で・徐々に)】【初めて出会うこと】が素材そのものの魅力の要素として共通していた。表2にそれぞれの要素についての説明を記す。

表2 「魅力的な素材」の要素

【繰り返し試すことができること】	何度も繰り返して試すことができること
【思い通りになること】	可塑性に富み、思った通りの形になったり、思い通りに扱えたりできること
【思い通りにならないこと】	不規則だったり、予想が難しかったりするために思い通り扱えないこと
【自由につくり変えることができること】	使う道具や組み合わせ、順序などを自由に選択し変更できること
【変化すること（一瞬で・徐々に）】	状態が変化すること
【初めて出会うこと】	初めて体験すること（感情体験を含め）

【繰り返し試すことができること】は、前述の「十分な時間・空間」のもとに達成される内容であるが、その素材の量を十分に確保しておくことも必要であるだろう。従って、「十分な時間・空間・量」が【繰り返し試すことができること】を支えると考えられる。キーワードとして挙げられていた「不満足さを感じるもの・こと」については、【思い通りにならないこと】と同義として捉えた。また、その素材同士の組み合わせの面白さも魅力として挙げられる。

以上より、幼児の「探究心」を育む環境は、「十分な時間・空間・量」を前提として「魅力的な素材」を構成していくことが望ましいであろう。さらに、「魅力的な素材」を保育者が把握したり、提供したりするうえでは、【繰り返し試すことができること】【思い通りになること】【思い通りにならないこと】【自由につくり変えることができること】【変化すること（一瞬で・徐々に）】【初めて出会うこと】といった要素を確認していくとよいのではないかと。さらに、教師は自分の準備した環境構成や自分の考えた素材の魅力に捕らわれ過ぎず、幼児が気付く新たな魅力や幼児と共に環境をつくり変えることにも考慮する必要がある。

(ii) 「探究心」を育む教師の援助

キーワードとしては「幼児が安心感・信頼感を抱けるよう援助する」「仲間として遊ぶ」「共感する」「モデルとなる」「提案する」「見守る・見届ける」「タイミング良く声をかける」「励ます」が挙げられた。しかし、前述の中間まとめにおいても課題として挙げたが、幼児のどのような姿を教師が見取り、援助しているのかが分からなかったため、その点を明らかにすることとした。

協議の結果、以下のように考察した。

- ・「幼児が安心感・信頼感を抱けるよう援助する」は【幼児が教師と安心感・信頼感を形成する】ことを促す
- ・「仲間として遊ぶ」は【幼児が教師と安心感・信頼感を形成する】ことを促す

- ・「共感する」は【幼児が教師と安心感・信頼感を形成する】【幼児が興味関心を抱く】ことにつながる
- ・「モデルとなる」は【幼児が興味関心を抱く】ことを支える
- ・「提案する」は【幼児がこれまでの経験を生かす】ことにつながる
- ・「見守る・見届ける」は【幼児が教師と安心感・信頼感を形成する】【幼児がこれまでの経験を生かす】状況をつくる
- ・「タイミング良く声をかける」は【幼児がこれまでの経験を生かす】ことを支援する
- ・「励ます」は【幼児が教師と安心感・信頼感を形成する】【幼児が繰り返し挑戦する】機会となる

また、昨年度の研究(研究紀要第67集p. 65)により「探究心」には「きっかけ」「試行」「結果」の段階があることが明らかになっている。「仲間として遊ぶ」「モデルとなる」ことは「きっかけ」の段階への直接的な援助、「子どもが安心感・信頼感を抱けるよう援助する」「共感する」「提案する」「励ます」「見守る・見届ける」「タイミング良く声をかける」ことは、「試行」の段階への間接的な援助であった。これらの関係性を図1に表す。

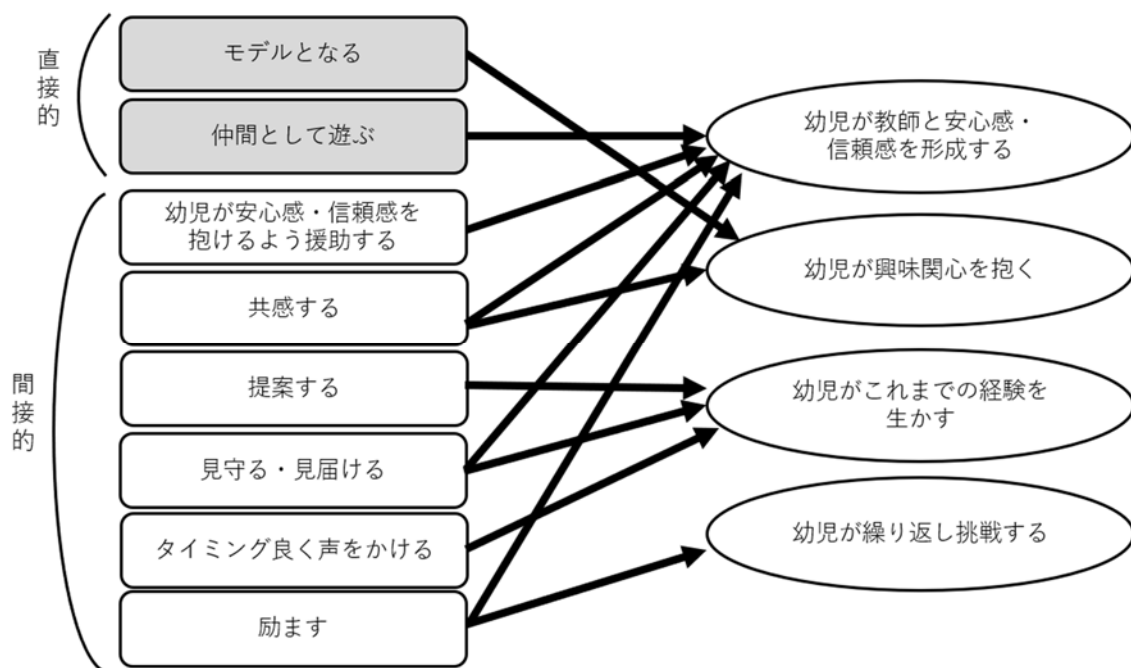


図1 「探究心」を育む教師の援助と幼児の姿の関係性

事例検討では、事例における教師の援助を考察していく中で、選択肢として他の援助の方法もあったのではないかという指摘が挙がることがあった。それらを“選択肢として”という項目に記した。これは、教師の援助によって幼児の探究する方向性を決めてしまっていたり、幼児の姿をより細かく見取ることで他の援助が考えられたりすることを示していると考えられる。

以上を踏まえると、「探究心」を育む教師の援助は、幼児の探究する姿が「きっかけ」

「試行」「結果」のどの段階にあるかを見取り、直接的な援助か間接的な援助のどちらが必要なのかを見極めることが提案される。幼児の姿を見取る際には、今までの経験や遊びの流れ、その幼児が興味をもっていること等も含めて考える事が必要である。さらに、教師の関わりによって幼児が探究する方向性を決めてしまいかねないことに留意し、教師の価値観を押し付けたり、探究の結果を求めたりしない教師の姿勢が重要である。

2. 今後の課題

本研究では、「探究心」を育む環境の構成と教師の援助について、具体的な内容を明らかにした。今後の課題として、「探究心」を育む環境の構成と教師の援助に年間を通して取り組むことで更にそれを追究していくこと、そして、それらを指導計画に位置付けていくことが挙げられる。